

# ある夜の星たちの話

小川未明

青空文庫



それは、寒い、寒い冬の夜のことでありました。空は、青々として、研がれた鏡のように澄んでいました。一片の雲すらなく、風も、寒さのために傷んで、すすり泣きするような細い声をたてて吹いている、秋のことでありました。

はるか、遠い、遠い、星の世界から、下の方の地球を見ますと、真っ白に霜に包まれていました。

いつも、ぐるぐるとまわっている水車場の車は止まっています。また、いつもさらさらといつて流れている小川の水も、止まって動きませんでした。みんな寒さのために凍ってしまったのです。そして、田の面には、氷が張っていました。

「地球の上は、しんとしていて、寒そうに見えるな。」と、このとき、星の一つがいました。

平常は、大空にちらばっている星たちは、めつたに話をすることはありません。なんでも、こんなような、寒い冬の晩で、雲もなく、風もあまり吹かないときでなければ、彼らは言葉を交わし合わないであります。

なんでも、しんとした、澄みわたった夜が、星たちには、いちばん好きなのです。星たちは、騒がしいことは好みませんでした。なぜというに、星の声は、それはそれはかすかなものであったからであります。ちようど真夜中の一時から、二時ごろにかけてであります。夜の中でも、いちばんしんとした、寒い刻限でありました。

りました。

「いまごろは、だれも、この寒さに、起きているものはなからう。木立も、眠っていれば、山にすんでいる獣は、穴にはいつて眠っているであろうし、水の中にすんでいる魚は、なにかの物蔭にすくんで、じつとしていいるにちがいない。生きていいるものは、みんな休んでいいるのであろう。」と、一つの星がいました。

このとき、これに対して、あちらに輝いていいる小さな星がいました。この星は、終夜、下の世界を見守っている、やさしい星でありました。

「いえ、いま起きていいる人があります。私は一軒の貧しげな家へのぞきますと、二人の子供は、昼間の疲れですやすやとよく休ん

でいました。姉あねのほうの子こは、工場こうばへ行って働はたらいているのです。弟おとうとのほうの子こは、電車でんしゃの通とおる道みちの角かどに立たつて新聞しんぶんを売うつているのです。二人ふたりの子供こどもは、よくお母かあさんのいうことをききます。ふたりふたり二人ふたりとも、あまり年としがいつていませんのに、もう世よの中なかに出でて働はたらいて、貧まずしい一家いっかのために生せい活かつの助たすけをしなければならぬのです。母はは親おやは、乳ち飲のみ児ごを抱だいて休やすんでいました。しかし、乳ちちが乏とほしいのでした。赤あかん坊ぼうは、毎まい晩ばん夜よ中なかになると乳ちちをほしがります。いま、お母かあさんは、この夜よ中なかに起おきて、火鉢ひばちで牛ぎゆう乳にゆうのびんをあたためています。そして、もう赤あかちゃんがかれこれ、お乳ちちをほしがると時分じぶんだと思おもっています。――

「二人ふたりの子供こどもはどんな夢ゆめを見みているだろうか？　せめて夢ゆめになり

と、楽しい夢を見させてやりたいものだ。」と、ほかの一つの星が  
 いいました。

「いや、姉のほうの子は、お友だちと公園へ行って、道を歩い  
 ている夢を見えています。春の日なので、いろいろの草花が、花  
 壇の中に咲いています。その花の名などを、二人が話し合ってい  
 ます。ふとんの外へ出ている顔に、やさしいほほえみが浮かんで  
 います。この姉のほうの子は、いま幸福であります。」と、や  
 さしい星は答えました。

「男の子は、どんな夢を見ているだろうか？」と、またほかの星  
 がたずねました。

「あの子は、昨日、いつものように、停留場に立って新

聞きを売うつていますと、どこかの大きおおな犬いぬがややつてきて、ふいに、  
子こ供どもに向むかかつてほほえつついたので、どんなに、子こ供どもはびびつつくりした  
でしよう。そのことが、頭あたまにあるとみえて、いま大きおおな犬いぬに追おい  
かけられた夢ゆめを見みてしくしくと泣ないていました。無む邪じ気きなほおの  
上うに涙なみだが流ながれて、うす暗くらい燈ともしび火ひの光ひかりが、それそれを照てらしています  
。」と、やさしい星ほしは答こたえました。

すると、いままで黙だまっていた、遠えんぼう方ほうにああつた星ほしが、ふいに声こえ  
をたたてて、

「その子こ供どもが、かわいそうじやないか。だれか、どうかしてやっ  
たらしいに。」といいました。

「私わたしは、その子こが、目めをささままささないほどに、揺ゆり起おここしました。



そして、それが夢であることを知らしてやりました。それから子供は、やすやすと平和に眠っています。」と、やさしい星は答えました。

星たちは、それで、二人の子供らについては、安心したようです。ただ哀れな母親が、この寒い夜にひとり起きて、牛乳を温めているのを不憫に思っていました。

それから、しばらく、星たちは沈黙をしていました。が、たちまち、一つの星が、

「まだ、ほかに、働いているものはないか？」とききました。

その星は、目の見えない、運命をつかさどる星でありました。下界のことを、いつも忠実に見守っているやさしい星は、

これに答えて、

「汽車が、夜中通っています。」といいました。

ほんとうに、汽車ばかりは、どんな寒い晩にも、風の吹く晩にも、雨の降る晩にも、休まずに働いています。

「汽車が通っている？」と、盲目の星は、きき返しました。

「そうです、汽車が、通っています。町からさびしい野原へ、野原から山の間を、休まずに通っています。その中に乗っている乗客は、たいてい遠いところへ旅をする人々でした。この人

たちは、みんな疲れて居眠りをしています。けれど、汽車だけは休まずに走りつづけています。」と、下界のようすをくわしく知

「よく、そう体が疲れずに、汽車は走れたものだな。」と、運命の星は、頭をかじげました。

「その体が、堅い鉄で造られていますから、さまで応えないのです。」と、やさしい星がいました。

これを知ると、運命の星は、身動きをしました。そして、怖ろしくすごい光を放しました。なにか、自分の気にいらぬことがあったからです。

「そんなに堅固な、身のほどの知らない、鉄というものが、この宇宙に存在するの？ 俺は、そのことをすこしも知らなかつた。」と、盲目の星はいました。

鉄という、堅固なものが存在して、自分に反抗するように

かんが  
考えたからです。

このとき、やさしい星ほしはいいました。

「すべてのものの運命うんめいをつかさどっているあなたに、なんで汽き車しゃが反抗はんこうできますものですか。汽車きしゃや、線路せんろは、鉄てつで造つくられてはいますが、その月日つきひのたつうちにはいつかはしらず、磨滅まめつしてしまうのです。みんな、あなたに征服せいふくされます。あなたをおそれないものはおそらく、この宇宙うちゅうに、ただの一つもありますまい。」

これを聞きくと、運命うんめいの星ほしは、快こころよげにほほえみました。そして、うなずいたのであります。

また、しばらく時ときが過すぎました。空そらに風かぜが出でたようです。だん

だん曉あかつきが近づちかいてくることが知しれました。

星ほしたちは、しばらく、みんな黙だまっていました。このとき、あ  
る星ほしが、

「もう、ほかに変かわったことがないか。」といいました。

ちようど、このときまで、熱ねつしん心に下したの地球ちきゆうを見守みまもつていま

したやさしい星ほしは、

「いま、二つの工場こうじようの煙突えんとつが、たがいに、どちらが毎日まいにち、早はや  
く鳴なるかといつて、いい争あらしつていゝのです。」といいました。

「それは、おもしろいことだ。煙突えんとつがいい争あらしつていゝのですか  
？」と、一つの星ほしは、たずねました。

新開地しんかいちにできた工場こうじようが、並ならび合あつて二つありました。一つの

工場こうじようは紡績工場ほうせきこうじようでありました。そして一つの工場こうじようは、製

紙工場いしこうじようでありました。毎朝まいあさ、五時ごじに汽笛きてきが鳴るなのですが、

いつもこの二つは前後ぜんごして、同じ時刻じこくに鳴るなのでした。

二つの工場こうじようの屋根やねには、おのおの高たかい煙突えんとつが立たっていました。

星ほし晴ばれのした寒さむい空そらに、二つは高たかく頭あたまをもたげていました。こ

の朝あさ、昨日きのうどちらの工場こうじようの汽笛きてきが早はやく鳴なったかということについ

て、議論ぎろんをしました。

「こちらの工場こうじようの汽笛きてきが早はやく鳴なった。」と、製紙工場せいしこうじようの煙

突つは、いいました。

「いや、私わたしのほうの工場こうじようの汽笛きてきが早はやかった。」と、紡績工場ほうせきこうじよう

の煙突えんとつはいいました。

結局、この争いは、果てしがつかなかつたのです。

「今日は、どちらが早いはやかよく気をつけている！」と、製紙せいしこうじ工場の煙突は、怒おこつて、紡績工場ぼうせきこうじようの煙突えんとつに對むかつていいました。

「おまえも、よく気をつけていろ！ しかし、二人ふたりでは、この裁さ判いはんはだめだ。だれか、たしかな証しょうにん人じんがなくては、やはり、いい争あらそいができて同おなじことだろう。」と、紡績工場ぼうせきこうじようの煙突えんとつはいいました。

「それも、そうだ。」

こういつて、二つの煙突えんとつが話はなし合あつていることを、空そらのやさしい星ほしは、すべて聞きいていたのであります。

「二つの煙突えんとつが、どちらの工場こうじょうの汽笛きてきが早いはやか、だれか、裁判さいばんするものをほしがっています。」と、やさしい星ほしは、みんなに向むかっています。

「だれか、工場こうじょうのあたりに、それを裁判さいばんしてやるようなものはないのか。」と、一つの星ほしがいました。

すると、あちらの方ほうから、

「この寒い朝あさ、そんなに早くはやから起きるものはないだろう。みんな床とこの中に、もぐり込んでいて、そんな汽笛きてきの音おとに注意ちゅういをするものはない。それを注意ちゅういするのは、貧しい家いえに生まれて親おやの手助けたすをするために、早くはやから工場こうじょうへ行って働くはたらくような子供こどもらばかりだ。」といった星ほしがありました。



「そうです。あの貧しい家の二人の子供も、もう床の中で目をさましています。」と、やさしい星はいいました。

それから後も、やさしい星だけは、下の世界をじつと見守つていました。

姉も、弟も、床の中で目をさましていたのです。

「もうじき、夜が明けますね。」と、弟は、姉の方を向いていいました。

また、今日も電車の停留場へ行って、新聞を売らねばならないのです。弟は昨夜、犬に追いかけられた夢を思い出していました。

「いま、じきに、製紙工場か、紡績工場かの汽笛が鳴る

と、五時<sup>じ</sup>なんだから、それが鳴<sup>な</sup>ったら、お起<sup>お</sup>きなさいよ。姉<sup>ねえ</sup>さんは、もう起<sup>お</sup>きてご飯<sup>はん</sup>の支<sup>した</sup>度をすするから。」と、姉<sup>あね</sup>はいいました。このとき、すでに母<sup>は</sup>親<sup>おや</sup>は起<sup>お</sup>きていました。そして、姉<sup>ねえ</sup>さんのほう<sup>ほう</sup>が起<sup>お</sup>きて、お勝<sup>か</sup>手<sup>て</sup>もとへくると、

「今日<sup>きょう</sup>は、たいへんに寒<sup>さむ</sup>いから、もつと床<sup>とこ</sup>の中<sup>なか</sup>にもぐっておいで。いまお母<sup>かあ</sup>さんが、ご飯<sup>はん</sup>の支<sup>した</sup>度<sup>ど</sup>して、できたら呼<sup>よ</sup>ぶから、それまで休<sup>やす</sup>んでおいでなさい。まだ、工場<sup>こうじょう</sup>の汽<sup>き</sup>笛<sup>ふえ</sup>が鳴<sup>な</sup>らないのですよ。」と、お母<sup>かあ</sup>さんはいわれました。

「お母<sup>かあ</sup>さん、赤<sup>あか</sup>ちゃん<sup>ちゃん</sup>は、よく眠<sup>ねむ</sup>っていますのね。」と、姉<sup>あね</sup>はいいました。

「寒<sup>さむ</sup>いから、泣<sup>な</sup>くんですよ。いまやつと眠<sup>ねい</sup>入<sup>い</sup>ったのです。」と、

お母<sup>かあ</sup>さんは、答<sup>こた</sup>えました。

姉<sup>ねえ</sup>さんのほうは、もう床<sup>とこ</sup>にはいりませんでした。そして、お母<sup>かあ</sup>

さんのすることをつだいました。

地<sup>ち</sup>の上<sup>うえ</sup>は、真<sup>ま</sup>っ白<sup>しろ</sup>に霜<sup>しも</sup>にとぎされていました。けれど、もうそ

ここに、人<sup>ひと</sup>の動<sup>うご</sup>く気<sup>き</sup>がしたり、物<sup>もの</sup>音<sup>おと</sup>がしはじめました。星<sup>ほし</sup>の

光<sup>ひかり</sup>は、だんだんと減<sup>へ</sup>ってゆきました。そして、太<sup>たい</sup>陽<sup>よう</sup>が顔<sup>かお</sup>を出<sup>だ</sup>す

には、まだすこし早<sup>はや</sup>かったのです。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「時事新報」

1924（大正13）年1月7日

※表題は底本では、「ある夜《よ》の星《ほし》たちの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「ある夜の星だちの話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2013年8月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある夜の星たちの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>